

陰性. Anti-HBs, Anti-HBcが陽性だった. 各種画像検査では肝右葉全体を占拠する腫瘍及び左様にも多発する結節を認めたが, 肝細胞癌としては非典型的であった. 各種 screening 検査では肝転移を来たすような悪性病変は認めず, 肝原発腫瘍と考え肝生検を行った. 病理診断は, 2010年WHO 消化器腫瘍分類の肝ステム細胞像を伴った混合型肝癌の中間細胞型と診断した. また, 腫瘍細胞全体でc-kit 強陽性だった. 治療はソラフェニブとIVRを選択し, 経過中に腫瘍の著明な縮小及び血流の低下を認め, 現在外来にて治療継続中である. 本症例は切除不能混合型肝癌であり予後不良が予測されたが, 肝動注療法及び, ソラフェニブが奏効している. SHARP 試験では, 血漿c-kit 値がソラフェニブ治療群の予後予測因子であったと報告されており, 本症例でもc-kit 強陽性とソラフェニブ治療効果の関連が考えられた.

17 Hepatic stem/progenitor cell に発現する polySia - NCAM の発見とその役割の紹介 ～エジンバラ留学研究～

Stem cell 研究と肝腫瘍との接点を含めて

土屋 淳紀

新潟大学医歯学総合病院
消化器内科

私は2013年7月末まで2年間Edinburgh 大学スコットランド再生医学研究所 Stuart Forbes 教授のもと研究を行った. そこで肝臓においてHepatic progenitor cell (HPC) を含むDuctular reaction (DR) に発現するNCAM にポリシアル酸 (polySia) が付加されることで, NCAM の接着機能がpolySia の負電荷を帯び, 高い水親和性を持つ性質により真逆の反接着機能へと変わる現象を確認した. この結果が意味するところは, 再生時にラミニンなどに囲まれ接着安定していたHPCが再生時にはその接着を切り, 遊走しやすい環境を整えるという意味合いがあり, DRの形成, 再生効率を左右する一要因と考えている (Hepatology 2014 accepted).

また近年, 画像, HE 組織所見では肝細胞癌 (HCC) と診断されながらもHPC マーカーが陽性になるHCC with progenitor cell feature が通常のHCCよりも予後不良報告されていたり, 最新のWHO 分類では混合型肝癌の病理分類に混合型肝癌はHPCに由来するコンセプトが採用され再分類されたり, HPCと肝癌の関係が注目されている事実も合わせて報告する.

18 AFP 高値を呈した胆管細胞癌の1剖検例

熊谷 和樹・石川 達・阿部 聡司
井上 良介・菅野 智之・渡邊 雄介
岩永 明人・関 慶一・本間 照
吉田 俊明・石原 法子*・西倉 健*

済生会新潟第二病院消化器内科
同 病理診断科*

19 当科で経験した Combined HCC/CCC に関して新しい WHO 分類, HCC with progenitor feature も含めて

小島 雄一・土屋 淳紀・安住 基
横尾 健・山本 幹・上村 博輝
兼藤 努・上村 顕也・田村 康
高村 昌昭・五十嵐正人・川合 弘一
山際 訓・須田 剛士・野本 実
青柳 豊・若井 俊文*

新潟大学医歯学総合病院
消化器内科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器一般外科学分野*

【目的】混合型肝癌は, 同一腫瘍内に肝細胞癌と胆管細胞癌の両方が混在した腫瘍で, 原発性肝癌の1%程度に存在する. 近年混合型肝癌はHPCに由来するというコンセプトが採用され, 最新のWHO 分類ではstem cell feature をとり入れた新たな分類が提唱された. 今回我々は新たな分類に基づき, 当科の症例を再分類し, 臨床的特徴や画像所見, 腫瘍マーカーの特徴をみた.

【方法】過去6年間に当科で経験した混合型肝